

欧米の大学図書館の貴重書に関する研究の特徴 —2000 年以降を中心に—

今井爽季

2000 年代以降インターネットが普及し、大学図書館においてもオンライン資料や貴重書のデジタル化が行われ、知の共有が行われている。そのような状況下、日本の大学図書館では、各大学図書館が所蔵する貴重書の管理や保存の実態、貴重書そのものの自体の内容が議論され研究されている。大学図書館における貴重書は、管理、保存そして利用は1つ1つが独立し機能しているのではなく、お互いが相互に影響し合うことで、貴重書の価値を最大限に活かし、後世への引き継ぐことが出来るしかし、大学図書館の貴重書の利活用に関する研究は包括的に論じられていない。そのため、本研究の目的は、2000 年代以降を中心に、欧米の大学図書館における貴重書の意義と役割に関する研究の特徴を明らかにすることである。

研究方法は、欧米の大学図書館における貴重書に関する文献を選定し、精読する。収集した文献 40 件のうち、4 件の事例は、事例の対象者、事例の実施機関、研究又はプログラムの目的、方法、成果、課題を挙げる。各文献を 6 つの視点から分析を行う。欧米の大学図書館における貴重書の理論としての位置づけ、実践として貴重書の対象や目的を分析し、貴重書はどのような役割、意義を詳述した。

研究の結果、以下の 3 点が明らかになった。第一に、貴重書は「利用に供する」役割が最も重要だと捉えられていることである。貴重書は博物館の展示品のように使用が制限されるのではなく、積極的に利用されることでその価値が高まると考えられていた。学生の学術的な研究の基礎となり、さらに貴重書が持つ歴史・文化を継承することを大きな目的としていた。第二に、大学図書館の貴重書を利用した事例では、学部生が、座学で得た知識を実践する過程を通し、自主性及び社会へ応用することを目的としていた。学部生は座学で得た知識を、貴重書を用いて実践することで、研究が現実社会で応用されることを学んでいた。このように学生が能動的に研究を行い、知識を社会や歴史とつなぐことが総じて重要視されていたのである。第三に、欧米の大学図書館の貴重書は、教育的意義があることがわかった。欧米では、管理・保存の研究だけでなく利用に関しても、研究から実践へと応用が進んでおり、学生が貴重書それ自体を学ぶのではなく、貴重書を学びの手段として活用していた。学習過程で自主性や新たな興味を触発する、貴重書を手段とした実践的な学びは、学生の将来や進路に大きく影響を与える可能性があるといえる。

本研究を通して、欧米の大学図書館における貴重書に関する研究は、貴重書の教育的意義及び能動的な利用による学生の研究に焦点を当てていることが明らかとなった。実践において、貴重書の管理、保存、利用が独立して機能するのではなく、1 つの輪を成し循環することで貴重書による「教育」を支えているのである。

(指導教員 小泉 公乃)